

■ 第77回調査研究方法検討会かわら版 ■

去る2020年9月5日(土) オンライン会議システム ZOOM を使用して、第77回調査研究方法検討会が開催されました。

検討会の報告要旨は、各演者の方へお願いしております。ご発表いただいた研究の概要とともに、検討会で議論された内容も含めご報告いたします。

5日(土)

「毛細管採血検査の活用法の検討」

井上佳也

1. 突発性発疹における熱性けいれん合併と鉄欠乏性貧血の関連(経過報告)

熱性けいれん(FS)の病態に鉄欠乏性貧血(IDA)が関連するとメタ分析で報告されているが、突発性発疹症(ES)の乳幼児におけるFS合併とIDAの関連を検討した報告はない。我々は、発熱期に毛細管採血検査を施行したESの乳幼児407例(男児199例、女児208例)を対象とし、FS合併群33例と非合併群374例の2群に分け、検査結果を含めた臨床像とFS合併の関連について後方視的に検討した。その結果、FS合併群は非合併群に比較してFSの家族歴を有する例が多く(54.5% vs. 13.1%, $P=0.000$)、月齢が高かったが(中央値(四分位範囲), 16(13-20)か月 vs. 13(10-17)か月, $P=0.003$)、検査上はヘモグロビンや赤血球平均容積(MCV)に有意差を認めなかった。また、IDAと診断($Hb < 10g/dl$ かつ $MCV < 70fl$)した16名全員がFS非合併群であった。目的変数にFS合併を、説明変数に家族歴、月齢、MCVを選択して多重ロジスティック分析を行ったところ家族歴のみが関連因子に抽出された。以上より、ESにおいて、FS合併に家族歴は関連因子となるが、その病態にIDAは関連しないことが示唆された。

2. 毛細管採血検査による赤血球容積粒度分布幅(RDW-CV)測定はIDAの診療に有用であるか?(予備的検討)

一般的にRDW-CVはIDAの病態では高くなると報告されている。発熱期に毛細管採血検査を施行したESの乳幼児407例を対象に、毛細管採血検査結果で得られるRDW-CVがIDAの診療に有用か検討した。最初にES乳幼児407例のMCVとRDW-CVの相関を分析したところ負の相関関係($r=-0.640$ (95%信頼区間:-0.694~-0.579)、 $P=0.000$)を認めた。しかし、IDAと診断し鉄剤投与を行った12例の経過を追うと、RDW-CVは治療前(14.4(13.7-14.7)%)よりも治療開始2~3か月後(17.7(13.7-18.4)%)に有意に高くなり、IDAの治療によりRDW-CVは低くなるという予測に反した結果となった。静脈血採血の検体や血清フェリチンの情報がないためその理由は不明であった。

調査研究方法検討会では1の議題の説明変数の選択の仕方について確認する質問があった。

「小児科診療所勤務者における新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）血中抗体の推移の検討」経過報告

長田秀和

2020年4月に採材した血清のELISAによるIgG抗体検査の結果について報告した。134検体全てが陰性であった。ELISAと併用しアボットのSARS-CoV-2 IgG抗体検査を実施するため、新潟大学医歯学総合病院と調整中である。今回は10月に採血を実施することを予定している。年内にELISAでの抗体検査の結果報告を目指す。

議論内容として、抗体に関することが多かった。具体的には、測定する対象はIgGでよいか、抗体はどれくらい持続するか、抗体陰性の場合の免疫記憶についての質疑があった。SARS-CoV-2は不明な点も多いが、最新の論文を確認し、先生方と相談しながら柔軟に対応したいと考えている。

「母乳代用品のマーケティングに対する意識調査」

江田明日香

育児用ミルクを製造販売する乳業メーカーの販売促進行為は、WHOが母乳育児を保護するために定めた「母乳代用品のマーケティングに関する国際規準」で禁じられているが、国内では未だに一般消費者のみならず医療や保健サービスにも及んでいる。今回そのマーケティングの実態調査を行いたいと考え、研究計画の立案に向けてご相談させていただいた。

「地域（岡山）における産後2週間健診の実態と産後うつとの関連」

中村奈保子

2017年度に産後健診の助成制度が創設され、全国の市町村で従来の産後1ヶ月健診に加えて産後2週間健診が実施されるようになった。産後2週間（およそ退院後1週間）という育児不安が強い時期に、医療者が支援に関わる意義は、母親のメンタルヘルスを保つ点で大きいと考えられる。今回、2週間健診の実態と産後うつ低減への寄与を調べたいと考え、検討会で、データ収集や研究方法の他、2週間健診に関する所感も含め、広く意見を求めた。2週間健診に小児科医の診察があるところは少なく、医療機関毎で支援の差は大きいのではないかというご意見や、倫理的な観点からデザインは観察研究になり、地域の保健師等と協力してデータを収集できればよいのではないかというご意見をいただいた。今後は、地域のデータが利用できるか交渉し、実施可能な研究計画を立てていく予定である。

「新型コロナ時代の小児科医へのインタビュー研究」

岡本茂

新型コロナの流行は日本の社会に様々な影響を及ぼした。その中で小児科医の臨床行動・生活にも大きな影響を及ぼした。特に、小児の受診の減少やワクチン・乳幼児健診の問題など状況は

多岐にわたる。流行が半年以上経過し、ある程度の新型コロナの病態がわかってきたが、この流行がいつまで続くのか、ワクチンはいつできるのかなど先の見通しは不明である。この状況下で小児科医の臨床行動をさぐり言語化することで、新型コロナの流行・流行後も含めた今後の小児科医の行動を言語化する。本研究は半構造化インタビューによる質的研究でありリサーチ委員会のアドバイスもあり質的研究方法検討会にて研究計画の再検討をしていただく予定である。

連絡先：〒820-0040 福岡県飯塚市吉原町 537 いいづかこども診療所 牟田広実
FAX: 0948-80-5632 , E-mail: qze05346@nifty.com